

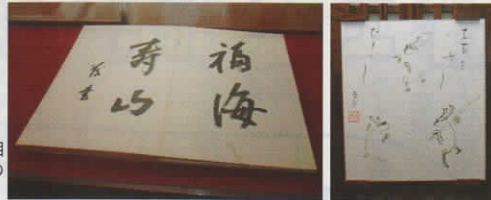


▲「リピーターのお客様が多いですが、最近は若いカップルも増えてます」と話す徳田誠一郎社長



▲国の登録有形文化財に指定された清輝樓の建物

▶吉田茂元首相(左)と野口雨情の色紙



かったのだが、本人は30歳までは、ほかの旅館でサービス業についているりと勉強をしたかったそうだ。

先代からは、事あることに「この旅館が今あるのは先祖のおかげだということをおぼれるな」といわれたという。そのため、小さいときから皿洗いや布団敷きなどの旅館の仕事のほかに、墓掃除をよくやらされた。また、従業員を大事にすることもたまにありました。

「館内に展示してある作品にしても、すべて先祖からの預かりものであり、歴代の従業員が維持・管理に苦労してきたまものなんです。決して私の力ではありません。ですから、それらを次の世代によりよい形で伝えていくことが、私の使命だと考えています。父も先代から同じようなことをいわれたと思います。そういった思いがあったからこそ、これまで続いていたんではないでしょうか」と誠一郎社長はふすまに張られた絵を見ながら話す。

その表れとして、社員の供養塔を徳田家の墓の横に設置。年に2回回職を呼んで供養している。

台風被害が転機をもたらす

誠一郎社長は地元への感謝も忘れない。というのも、何らかの目的で宮津市に人が来てくれることが、清輝樓の宿泊客の増加につながるかと考えているからだ。そのため、地域の助けになることをしようと常に心掛けているという。

誠一郎社長がその思いを一層強くしたのは、こんな出来事があったことも影響している。

平成16年秋、台風23号がこの地方を直撃した。隣接する舞鶴市において、バスの屋根で助けを求めている被災者の姿がテレビで繰り返して報道されたので、記憶している人も多いと思う。この台風で宮津市も大きな被害を受けた。

特に海に近い清輝樓はひどかった。玄関はひざの高さまで浸水し、とても営業できる体制ではなくなった。そこで、翌日から社員総出で復興作業を行い、1カ月後に何とか一部営業できるようにになった。

「その間、うちの人は毎日様子を見に来て、励ましてくれました。そして、一部営業できるようにになったときには、うちの旅館でわざわざ宴会を開いてくれたんです。これは大変ありがたかったです。これも先祖のおかげで、父や祖父とゆ

かりのあった人がうちの旅館を応援してくれたわけです」と振り返る。

また、同業者の中にはこう言うて励ましてくれた人もいた。「大変だと思ふな。今回のことは大きく変わるチャンスだと考えたらいい」。そして、リニューアルすることを勧めたという。

「私にはそんな発想はなかったのですが、とても印象的でした。それで、旅館を根本から見直すことにしたのです」

それまでロビーはじゅうたん敷きで、お客にはスリッパを履いてもらっていた。それを、廊下や階段も含めてすべて畳敷きにし、素足で歩けるようにした。

「できるだけ得意分野を伸ばそうと考えました。近代的な部分はほかのホテルに任せて、うちの個性を出すようにしたわけです。最近、日本でも味わえなくなった、古き良き日本の文化を味わっていただくことに力を入れました」と誠一郎社長は述べ、こう付け加えた。

「旅館は日本文化の継承者であり、地元の文化を後世に伝えていく使命があると考えています」

そのためなら、誠一郎社長は何でもやる方針で、現在、宮津の歴史について勉強しているそうだ。

(文・山田清志)